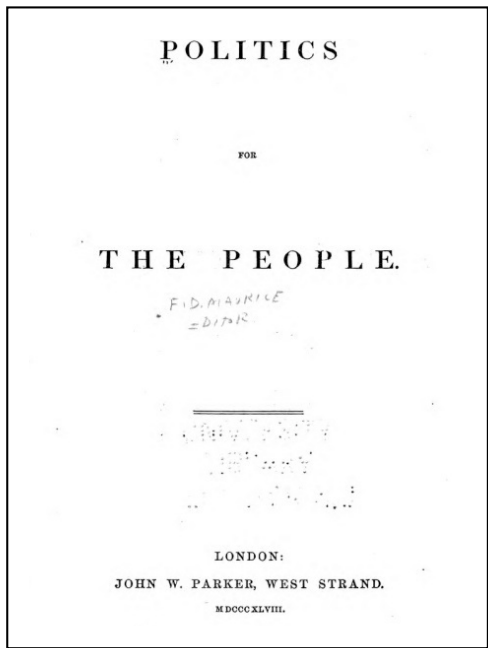


一九世紀英国、ヴィクトリア朝における

「人民のための政治」

J. M. ラドローと F. D. モーリス、キリスト教社会主義の創始者!!



写真：『人民のための政治 (POLITICS FOR THE PEOPLE)』書影 (プリンス頓大学図書館所蔵)

基督教友愛新聞

発行所：
白十字キリスト教
社会主義研究会
(<http://www.ichtus.net/css>)
発行人：
倉井 香茅哉 (独立系研究者)

今号では、前号につづき、産業革命以後の欧州に生じた変化をふまえた上で、一九世紀イギリスにおけるキリスト教社会主義運動の動向を紹介したい。今回の主役は、『人民のための政治』を編集・発行した弁護士 J. M. ラドローと聖職者の F. D. モーリスである。一八三〇～四〇年代のイギリス社会を席巻したチャーティスト運動、一八四八年のパリ二月革命に象徴されるように、一九世紀のヨーロッパ世界は、エンゲルスが予兆した革命の時代を迎えていた。しかし、のちのキリスト教社会主義運動の指導者たちは、当時欧州を

創刊した。その後、一八五〇年二月に仕立工生産協同組合 (the Working Tailor's Association) を設立した際、モーリスは、自らのグループに「キリスト教社会主義者」の名称を与えた。彼らはチャーティストと連携し、労働者との定期的な集会を開いた。また、一八五四年一〇月には、労働者を啓発し、職場での協同を支援すべく、ロンドン労働者カレッジ (Working Men's College) という成人教育機関を設立した。

「神の秩序」の恢復か、社会変革を目指すのか。——それが問題だ!!

しかし、このグループのメンバーは、イギリスの社会秩序を信頼していた。そのため、アソシエーション労働者生産協同組合を「社会的プロテストの手段」ととどめ、あくまで「神の秩序」の上に社会を再組織するための手段にすぎないと考えた。ロンドン労働者カレッジ (WMC) の初代校長を務めるなどの教育事業への貢献は、彼の関心がもつばら道徳的な訓練、人間精神の救済に向

会の聖職者であったモーリスは、基本的にイギリスの社会秩序を信頼していた。そのため、アソシエーション労働者生産協同組合を「社会的プロテストの手段」ととどめ、あくまで「神の秩序」の上に社会を再組織するための手段にすぎないと考えた。ロンドン労働者カレッジ (WMC) の初代校長を務めるなどの教育事業への貢献は、彼の関心がもつばら道徳的な訓練、人間精神の救済に向

かつていたことを表している。一方、弁護士のラドローは、労働者生産協同組合をより積極的な「社会変革の手段」と考えた。彼は、「社会主義」の「キリスト教化」という運動目標を達成するためには労働者生産協同組合に「社会変革の手段」としての組織的機能が確立されなければならないと考え、労働者を「個人的労働の束縛」から解放するための方法として、「利潤の fellowship」を

朝鮮大学校創立 60 周年記念学園祭

誇り高き朝鮮民族の文化と教育、さまざまな活動の詳細について、屋外の特別展示、自然・歴史博物館の展示に学ぶ。

二〇一六年一月一日の展示である。有史以前三日 (日)、朝鮮大学校創立六〇周年記念学園祭を視察した。アジア交流の要衝・北九州市に教育を受けた一人として、朝鮮文化は幼い頃から馴染み深い。学生たちの模擬店、ステージ企画を楽しむとともに、屋外の特別展示、自然・歴史博物館の展示から、朝鮮半島の歴史、とくに戦後の在日同胞が経験した苦難を偲んだ。今回、とくに圧巻だったのは、学内に併設されている自然・歴史博物館

の展示である。有史以前現在の朝鮮半島に生息する生き物たちの多様性を学んだ。また、季節とともに「渡り」を行う鳥類の生態からは、生命の活動に国境線はない、という初歩的な事実に気づかされた。地球史の視座に立ち、ユーラシア地帯の平和のため、朝鮮と日本をはじめとする各国の協力が実現することを願ってやまない。

【編集部より】朝鮮民主主義人民共和国の指導者・金正恩氏の兄、金正男氏の暗殺事件に際し、心から哀悼の意を表します。

天帳院日記

自分は保守主義者だと考えてきた。歴史と伝統、文化を守り、後世へと継承することを重視する立場だ。きつ

かけは他愛ない。二〇〇三年のイラク戦争を背景に、福岡天神の反戦デモに参加するも、左翼活動家と議論になった。小林よしのり・西部邁の著作を読み、上京後、一水会フォーラムに参加した。しばしば否定的なニュアンスを伴う「右派」「保守反動」という表現に誇りを抱いた。自分なりの思考の過程だが、反省多き時代でもある。

ところで、二〇〇〇年代には、「保守」新自由主義」という図式があった。福祉国家主義者を同時に自認していた自分にとって、これは意外だった。保守主義者であり、福祉国家主義者であることは矛盾だろうか。キリスト教社会主義者であることは矛盾だろうか。僕はただ、自己自身の究極の価値規範に誠実でありたい。そのための「言葉」を探している。

研究発表：倉井香茅哉 (本会書記長) 賀川豊彦と内村鑑三 (副題未定)

2017 年 3 月 19 日 (日) 14:00~16:00
会場：鶴川ボプリホール 練習室 1 (地階)

主催：聖書と内村鑑三に学ぶ会

二〇一二年六月
その一：キリスト教社会主義運動の開始、
『協同の発見』p.120 (協同総合研究所、
二〇一二年六月)

義運動の黎明期における展開を概述したい。

【参考文献】
(一) 松村高夫「マルクスと労働貴族 (上)」
——ロンドン・ハリスンの所論との関連で——
『三田学会雑誌』Vol.76 No.5 (慶應義塾経済学会、一九八三年二月)
(二) 藤井佳子「Working Men's Collegeの昨日、今日、明日——トマス・ヒュースが F. D. モーリスらと紡いだもう一つの学校物語——」、『英語学英米文学論集』第三九号 (奈良女子大学英語英米文学会、二〇一三年三月)
(三) 中川雄一郎「労働者生産協同組合その一：キリスト教社会主義運動の開始」、『協同の発見』p.120 (協同総合研究所、二〇一二年六月)

告知

キエルケゴール読書会

（第 2 回 白十字の会・定期読書会：キリスト教社会主義×ヘーゲル左派）

テキスト：キエルケゴール『死に至る病』
（岩波文庫）

【プログラム】

開会
倉井香矛哉「キリスト教社会主義概論 2」
参加者一同「キエルケゴール読書会」
休憩
質疑応答、議論、問題提起
閉会

（全体で 2～3 時間程度を予定）

【その他、参考図書】

イマヌエル・カントの信仰的著作
ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』
ダーフィット・シュトラウス『イエスの生涯』
フォイエルバッハ『キリスト教の本質』
マルクス『資本論』
カール・バルト、パウル・ティリッヒの各著作
19 世紀英国における産業革命とキリスト教社会主義
『新紀元』同人、賀川豊彦らのキリスト教社会主義
内村鑑三、無教会の伝道者たち
その他
（順不同）

日時：2017 年 3 月 25 日（土）14 時～17 時

（途中入退室可。会場は一般の喫茶店・ファミリーレストランですので、ご都合のよい時間帯にお越し下さい。）

場所：都内喫茶店を予定

※ 今回は、四ツ谷界隈の喫茶店／ファミリーレストランでの開催を予定しております。
詳細は、書記長の倉井（独立系研究者）から参加希望者の皆様へ個別に連絡いたします。

※本読書会は、学術的関心に基づく有志の集まりです。主催団体名に「キリスト教社会主義」と銘打っておりますが、「信仰の有無・教派の別」等は一切問いません。

主催：白十字キリスト教社会主義研究会